

2026 年 6 月 12 日

「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません」

●ルカ 9・11b-17

日常の中でだれでも、不安な状態、圧倒的な何ものかによって自分がちっぽけに見える状態は、だれにでも起こることでしょう。私の経験では、長期海外留学に出かける直前の生徒たちの心の状態などがこれに当てはまるようです。最初はウキウキしていた彼女たちですが、出発直前になって、にわかに不安になる。もっと英語をやっておくべきだったのに、などという後悔と共に、自分がちっぽけな存在に思えてくるのです。そのような彼女たちに、私がよく話をするのが、この奇跡物語の箇所です。とにかく、今の自分を神様にお捧げするようにと。あとは、神様に任せなさいと。大学入試の直前もそうでしょうし、家族や近い人、あるいは、自分自身に病気や事故が起こってしまうようなこともないとは限らないわけです。自分の力のみでは乗り越えられそうにない、と意気消沈しそうになることは誰にでも起こるでしょう。

夕暮れ時に、五千人もの会衆を解散させずにむしろ、「あなた方が彼らに食べ物を与えなさい」と言われた時に、たった五つのパンと二匹の魚しかない現実に向き合った弟子たちも、自分たちの力ではどうしようもない状況に立たされます。群衆を解散させて、各自食べ物を買いに行かせたらどうか、という弟子たちの現実的な提案は聞き入れられなかったのでしょう。彼らは、イエスの命じる通りに、群衆を五十人ずつ分けて座させます。それだけでも気の遠くなる話です。座らせた後はどうなるのか、先は見えません。しかしながら、とにかく弟子たちが従ったのは、イエスに対する絶対的な信頼からでした。その信頼とともに、もてるものすべてを差し出した時、ヘトヘトになってもやり遂げた時、彼らは有り余る恵みの到来を、奇跡という形で体験します。皆が食べて満腹し、残ったパン屑だけでも 12 籠もあったのです。

中国のことわざに、「人事を尽くして天命を待つ」というものがあります。今回のたとえ話を私が読む時、このことわざも同時に味わっています。「天命」は、天からの命令、人が天から託された使命と受け取ることができるでしょう。やるべきことはすべてやり、次のステージにおいては、自分のなすべきことを、天から受けて立つ心の状態は、まさに今回の聖書の箇所と似ています。いずれにせよ、自分のなすべきことをやり尽くす、そして、信頼してその命（めい）に従った者たちのみが体得する恵みの境地があるのだということを、今回は教えてくれています。

生徒たちに、私はこう言います。「とにかくあなたのもっている力を限界まで出しきって、それを信頼して全部神様に捧げてごらんください。気がつけばあなたはきっと、恵みの中にいますよ」と。イエスがこの日、群衆に説かれた「神の国」とは、このような絶大な信頼の果てに来る、恵みの時と場所のことだったのかも知れません。